

コンゴの性暴力と紛争を考える会（ASVCC）主催
ムクウェゲ医師ノーベル平和賞受賞記念フォーラム
「コンゴの課題を考える」

【日時】 2019 年 1 月 31 日（木） 18:00～20:00 （開場 17:30）

【会場】 文京シビックホール 3 階会議室 1・2

【登壇者】

米川正子 （ASVCC 代表／立教大学 特定課題研究員）

華井和代 （ASVCC 副代表／東京大学政策ビジョン研究センター 講師）

ジャン＝クロード・マスワナ （ASVCC アドバイザー／日本アフリカビジネス代表取締役）

小島千晶 （ASVCC メンバー）

【概要】

本フォーラムは、2018 年 12 月のデニ・ムクウェゲ医師のノーベル平和賞受賞記念フォーラムとして開催した。オスロでの授賞式や祝賀会に参加した ASVCC メンバーからの報告に加え、ムクウェゲ医師の受賞スピーチの重要性や 2018 年に行われた大統領選挙の問題点などについて解説した。今回のフォーラムははじめての大学キャンパス外での開催であり、ASVCC の市民活動としての位置づけを強めたものとなった。フォーラムには総勢 74 名が参加し、コンゴの情勢に対する関心の高まりが感じられる会となった。



趣旨説明&報告①：「ムクウェゲ医師受賞スピーチの概要と天然資源に関わる消費者責任」

華井和代 （ASVCC 副代表／東京大学政策ビジョン研究センター 講師）



ASVCC 副代表の華井和代が、ASVCC の紹介、本フォーラムの目的、ムクウェゲ医師の受賞スピーチの概要、及びコンゴ東部の現在の紛争状況を説明した。

華井によれば、ムクウェゲ医師のスピーチは、1. 主に実体験に基づく強いメッセージ、2. 紛争鉱物問題の指摘、3. 国の指導者・権力者の腐敗への言及、4. 国連マッピングレポートへの言及、5. 正義の実現に向けた「私たち」の責任の間かけという 5 つのポイントを有していた。特に、紛争鉱物問題は、ムクウェゲ医師が関わるコンゴの性暴力と深く関わっている。

1996 年に始まったコンゴ紛争は、2003 年の和平合意にもかかわらず現在まで続き、600 万人もの犠牲者を出している。コンゴ東部では 3TG と呼ばれる鉱物（スズ、タングステン、タンタル、

金)が紛争資金として利用され、それにとまって国軍と武装勢力による深刻な性暴力が行われてきた。住民に恐怖を植え付け、家族やコミュニティを破壊することを目的とした性暴力は、組織的に行われる「紛争の武器」という特徴をもっている。

国際社会は、紛争鉱物取引規制や原産地認証制度を導入してこのような状況に対抗してきたが、規制の導入後も状況の好転は見られない。むしろ規制導入及び国連・国軍による掃討作戦の結果、武装勢力が分派し、その数が増加する事態となっている。2012年に40以上と報告されていた武装勢力は、2015年には70以上となった（実際にはより多くの武装勢力の存在が推定されている）。分派した30〜50名程度の小規模武装勢力は、道路封鎖で収入を得るようになり、コンゴ東部だけでも798箇所の道路封鎖が報告されている。また、掃討作戦によって投降した武装勢力が国軍に統合されたり、人権侵害の加害者が処罰されないといった問題の影響から、人権侵害の3割には警察と国軍兵士が関わるといった状況が生まれている。道路封鎖も、798箇所のうち、政府系の封鎖が569箇所を占めている。そもそも原産地認証制度自体の信頼性も疑わしく、改善の余地を残している。

最新情報として華井は、コンゴにおける性暴力や紛争鉱物取引の現状を摘発した2018年12月の国連専門家グループ報告書を紹介した。報告書には、2018年9月に発生したシャブンダでの17名以上の組織的レイプ事件を主導した武装勢力の司令官が逮捕されたこと、その武装勢力の資金源が鉱物取引だったこと、国軍部隊が違法な鉱物採掘に従事し、合法サプライチェーンに紛れ込ませている事実などが報告されている。

報告の最後に、ムクウェゲ医師の受賞後、ムクウェゲ医師の活躍を描いたドキュメンタリー映画『女を修理する男』の上映会が日本全国各地で開催され、1月に入っても映画での啓発活動が続いているという喜ばしいエピソードも紹介した。

報告②：「2010年国連報告書（マッピングレポート）コンゴ東部における重大な罪と虐殺」

米川正子（ASVCC代表／立教大学 特定課題研究員）



ムクウェゲ医師が受賞スピーチで言及した2010年の国連報告書「国連マッピングレポート」、及びレポートで記録されているコンゴ東部におけるルワンダ軍による「虐殺」行為について解説した。

本報告書は1280人の目撃者のインタビューをもとに、1993〜2003年、コンゴ全国で起きた617以上の戦争犯罪や人道に対する罪、さらに集団虐殺を報告しているにもかかわらず、国際的な場でそれらの罪が全く審議されていないことを指摘した。その中でも、1996〜97年にルワンダ政府軍やコンゴ武装勢力（AFDL）がコンゴ東部で犯した組織的な集団殺害が「虐殺」に相当する可能性を指摘している。

本報告書を理解するためには、コンゴ紛争とルワンダ虐殺の関係を知る必要がある。1990 年から 1994 年にかけてルワンダ政府と反政府勢力（RPF）による内戦が勃発し、1994 年の大虐殺後に RPF が政権を奪取した。この時、多くのルワンダ人とともに、旧政府軍や民兵（インテラハムウエ）を含む虐殺首謀者がコンゴ東部に越境し、彼らがコンゴ東部での難民キャンプを軍事化したと言われる。ルワンダ新政府となった RPF は、これを口実に 1996 年、コンゴ東部に侵攻し、難民キャンプを襲撃した。当時、RPF とコンゴ東部に越境した旧政府軍と民兵は明確な敵対関係にあったが、襲撃ではルワンダ難民や地元のコンゴ人計数万人が標的とされ、そのほとんどが女性や子ども、年配者、傷病者といった罪のない人々であった。自分自身も 1959 年、ルワンダからウガンダに逃れた元難民であり、難民の心理をよく理解する新大統領のカガメ大統領は、自国政府に反発する難民が隣国にいる状況を脅威に感じ、攻撃に至ったと推察される。以上の背景から、ムクウェゲ医師による本報告書への言及は、1996～97 年に自国政府に攻撃された当時のルワンダ難民からも大いに讃えられる出来事であったことが理解されよう。

なお報告書で摘発されたコンゴ東部の難民キャンプの攻撃について、ルワンダ政府は、コンゴに越境した 1994 年の虐殺首謀者を「国の安全保障」の名目で攻撃したに過ぎないと主張し、自国の行為を正当化している。報告書は 2010 年 8 月、公開前にフランス誌「ル・モンド」にリークされ論争を呼んだ。この際、ルワンダ政府は報告書を公表するならば、スーダンのダルフル地方から自国の PKO 要員を撤退させると国連安保理を脅迫した。また、リーク直後に蕃国連事務総長はキガリに入り、ルワンダ政府をなだめたと言われる。それと関係しているから不明だが、報告書の公開後、安保理など国際的な場で報告書が取り上げられることはなかった。

実は RPF による「虐殺」の実態は、既に 1998 年の国連ガルトン・レポートでも明らかにされている。また、RPF の罪については、国連の人権報告書やフランス・スペイン判事の起訴状も多数提出されている。それにもかかわらず、ルワンダ政府は 1994 年の大虐殺に国際社会が関与しなかったことを外交カードとし、大湖地域的外交を意のままに動かしてきた。しかし近年、「多数派フツによる少数派ツチに対するジェノサイド」という 94 年の虐殺の一般説は、「フツ、ツチ両者によるダブル・ジェノサイド」であったという説が有力になっており、本来ルワンダ政府の主張は通用するものではない。

また国連報告書では、大湖地域における不処罰と暴力に終止符を打つため、コンゴ国内と国際混合裁判所の設立が提案されている。しかし虐殺の認定同様に、具体的な議論も国連総会ではなされてこなかった。ムクウェゲ医師が演説中に本報告書を 2 回言及したことで、国際的な無視を再び強調した。

※国連マッピングレポートはこちらから入手可能

https://www.ohchr.org/Documents/Countries/CD/DRC_MAPPING_REPORT_FINAL_EN.pdf

報告③：「コンゴ人から見たノーベル平和賞受賞と 2018 年大統領選挙」

ジャン＝クロード・マスワナ（ASVCC アドバイザー／日本アフリカビジネス代表取締役）

ASVCC のアドバイザーであるコンゴ出身のジャン＝クロード・マスワナが、ムクウェゲ医師のノーベル平和賞受賞の意義と 2018 年 12 月に行われた大統領選挙の問題点について解説した。



はじめにマスワナは、ムクウェゲ医師の受賞がコンゴにとっていかに歴史的な出来事であるかを強調した。今回の受賞は、コンゴ人が初めて受賞した国際的な賞であり、中央アフリカ 12 カ国においてノーベル平和賞を受賞した初めての例でもある。ムクウェゲ医師のノーベル平和賞受賞は、コンゴでの虐殺が深刻な問題であることが国際的に認められたという意味をもち、コンゴ人は大変喜んでいる。その一方で、コンゴの国営放送はこの出来事を完全に無視しており、報道されていない。そのため、コンゴに住む多くの人は SNS でこのニュースを知った。祝い事が好きという国民性を持つコンゴ人であるが、政府からの処罰を恐れて、このような歴史的な出来事にもかかわらず国内でお祝いがされることはなかった。

コンゴには真の政治的リーダーがいないという深刻な問題がある。その点で、公の人として発言権を持ち、信頼できるリーダーシップをもつムクウェゲ医師は大変稀有な存在である。コンゴの人々は、ムクウェゲ医師を、女性の権利の擁護者であり、人権活動家であり、医療従事者であり、教育者であり（コンゴ人では少ない博士号修得者）、政治・民主主義の活動家であり、牧師でもあると広く認識しており、国際的にも医師のこれらの活動はよく知られている。

このように、ムクウェゲ医師の活動は広く知られているがコンゴ国内ではある意味無視されているとも言え、医師が発揮するリーダーシップがコンゴ国内の政治の場で存在していないという問題が顕著に現れた大統領選挙について解説した。

コンゴの大統領選挙は本来、カビラ大統領の憲法上の任期が終了した 2016 年の 12 月に行われるはずだったが、延期された末に、2018 年 12 月 30 日に実施された。国内外の団体からの圧力でやむなく実施せざるを得ない状況になったのであるが、カビラ大統領は選挙戦の過程を掌握し、管理していた。大統領の三選が禁じられており立候補できない自身の代わりに、腹心であるシャダリ氏を立候補させた上で、選挙戦の 1 年前に選挙を監視する判事 6 名を彼自身で選んだり、信頼する軍の将校を戦略的なポジションにつけ、影響が及ぶようにした。また、反対勢力の支持が多数を占める在外コンゴ人および北東地域（ベニ）の国民が投票できないようにした。このような政策により、結果として、100 万人分の票が除外されたことになった。

周到な準備をしていたカビラ氏であったが、推薦していたシャダリ氏の獲得票数の少なさから、野党 UDPS の大統領候補であるチセケディ氏との取引を余儀なくされた。反対派の立候補者の中でも、チセケディ氏はカビラ勢力にとってそれほど脅威ではないとされている勢力である。選

挙後、開票結果の公表が遅れたのは、カビラ氏がチセケディ氏を不正に「勝たせる」ための交渉をしていたからである。

1月10日に、チセケディ氏の得票率38%、ファユル氏34%、シャダリ氏23%としてチセケディ氏の勝利が発表された。カビラ氏最大の脅威となる反対派閥と親しいファユル氏は、この選挙委員会の開票結果を否定し、選挙の詳細なレポートを求めた。しかし現在まで選挙委員会は開示を拒否している。

このような開示拒否を受け、カトリック司教協会は、メディアに独自の選挙結果を公開した。協会は今回の選挙にあたり、4万人の監視員を投票所に送り、調査を行っていた。また、その他いたるところで実際の選挙結果が暴露された。それらはいずれも、公式発表と異なりファユル氏が60%を獲得したという結果であった。

こうした状況を受け、アフリカ連合（AU）は選挙結果の集計が信頼性にかけるとして再集計を要請した。しかし、コンゴ政府はAUに検証の余地すら与えず、1月24日に正式にチセケディ氏がコンゴの新大統領に任命された。当面コンゴの状況が良い方向に変化する兆しは見られないとマスワナは語った。

※大統領選挙についての詳細は、ジャン＝クロード・マスワナ「コンゴ民主共和国の不正選挙と混乱」岩波書店『世界』2月号に掲載されている。

報告④：オスロでの授賞式・祝賀会の様子

小島千晶（ASVCCメンバー）



最後に、オスロでの授賞イベントに参加したASVCCメンバーの小島千晶が現地での様子を報告した。12月10日のノーベル平和賞授賞イベントとしては、オスロ市庁舎での授賞式、晩餐会、市民や支援者による松明行進、在外コンゴ人主催の祝賀会が開催された。授賞式にはマスワナが列席し、米川、華井、小島は中継会場で多くの支援者と一緒に授賞式の様子を見守った。中継会場でムクウェゲ医師の力

強い演説を観ていた多くのコンゴ人は、国旗を振って喜んでいて。また、夕方の松明行進では、世界各地から集まった支援者がナディア氏とムクウェゲ医師の名を呼び、「We want peace!」と繰り返す姿が印象的であった。夜の祝賀会には大勢のコンゴ人が集まり、有名な司会者やミュージシャンのパフォーマンスもあり、大いに盛り上がった。ASVCCメンバーは、ムクウェゲ医師の活動を描いたドキュメンタリー映画『女を修理する男』の原作者や監督とも会うことができた。

しかし、司会の華井によると、盛り上がっていた祝賀会はムクウェゲ医師が「国外に在住するコンゴ人は、情報にアクセスし、自由な発言ができるからこそ、行動してほしい。その責任がある」と強調したとき、それまで祝賀ムードで喜びにあふれていた場の空気が変わったという。身の安全が懸念されたためにムクウェゲ医師が晩餐会に出席できたのはわずか15分ほどであった

が、ムクウェゲ医師のスピーチはコンゴを取り巻く諸問題の本質を突く、国際社会に大きな影響を与える内容であった。

質疑応答

会場から寄せられた主な質問と登壇者の回答は以下の通りであった。

質問：難民への法律支援に関わっているが、コンゴ出身者で、野党UDPSのメンバーだという方が大勢いる。UDPSのチセケディ氏が大統領になったことで難民の状況は変わるのか。

マスワナ：それはもう少し状況を見なければわからない。情勢に注目する必要がある。

質問：鉱山の採掘権は歴史的にどのように定められてきたのか？

華井：基本的に鉱山の採掘には国の許可が必要である。コバルトや銅は大企業が政府と合同会社を持って採掘するため、採掘権は合同会社が持っている。その一方で3TGは企業が関与しない小規模手掘り鉱（ASM）で行われており、法律では採掘してよい区域が決まっているが、現在は無法状態で国立公園すらも掘られているような状態である。誰でも参入できる状態であり、現状では国軍の末端兵士等も採掘に関わっている。

質問：恐怖を植え付ける方法が数ある中で、性暴力が特に用いられてしまう理由、その特異性は？

米川：1つは、性器の傷は一般的には医者しか見ることができないために、不可視化できる点である。2つ目に、コミュニティの破壊につながる点である。妻が被害者になってしまうだけで夫としては受け入れるのが難しいが、さらに妻が妊娠したり、夫の前でそのような行為をされてしまうケースもあり、結果として妻は家庭にいられなくなりコミュニティが崩壊してしまう現実がある。

質問：他の場所で行われる暴力より残虐性が高いという特徴は、もともと女性蔑視の傾向があるからなのか？つまり、そのような残虐性は、元から存在するコンゴの社会規範・倫理規範とどのような関わりがあるのか？

華井：何が「もともと」なのかは慎重に考える必要がある。ベルギーの植民地時代にも残酷な暴力は多数行われており、平時のコンゴにおけるジェンダー観や倫理観が崩壊した時点を突き止めるのがとても難しい。性暴力加害者の倫理観の崩壊は、ベルギー植民地期、モブツ時代を通じてずっと自分たちの社会のあり方をコンゴ人自身が決めることができなかったという歴史的経緯に加えて、長引く紛争が影響していると考えられる。

質問：1994年のルワンダでの大虐殺後、虐殺の首謀者（フツ）が旧政府軍であり、コンゴに逃亡した、という説明があった。なぜ虐殺をされた側（ツチ）が政権を奪取できたのか？

米川：一般に虐殺首謀者はフツと言われているが、RPFのツチも虐殺に関わっている人がいる。もともとジェノサイドは（ツチ側の）権力の奪取が目的だったとも言われており、RPFはウガンダ等国外からのサポートもあったので、政権を奪取できたのだと思われる。

